

BOOK Review

医療管理

病院のあり方を原点からひもとく

評者

河北 博文 社会医療法人河北医療財団理事長

マネジメントの定義は、その組織が“継続して社会価値を創り続けること”と考えています。組織が医療機関であれば病院の理念を言葉として明確に示し、それを浸透させることが開設者並びに管理者としての理事長、院長の第一の責任です。そして、社会価値を継続して創るということは、人・資金・情報に加え、天の時、地の利などの要素を最大限に活用する必要があります。よく、人・物・金と言われますが、物は人が集まり、ベクトルを揃えて活動し、資金調達が十分にできれば買ったり、設置したりすることはできますから、二次的な要素だと考えています。

医療法第一条の五には病院は「科学的でかつ適正な診療を受けることができる便宜を与えることを主たる目的として組織され、かつ、運営されるものでなければならない」と書かれています。わが国の病院が組織体であるということを認識し、運営が体系的であるということはいつから始まったのでしょうか。聖路加国際病院を開設したRudolf B. Teuslerは「This hospital is a living organism……」と宣言しています。組織は常に生命ある有機体であり、すなわち、形態的・機能的に分化しつつ異なる部分が一つの内面的原理（理念）によって統一されてできた全体であり、目的と事業を実現するものです。このことは実は、医療機関内部における医療の質のみならず、社会的に医療制度そのものの質によって大きく影響を受けることになります。医療財源、提供体制の計画、さらにプラ

イマリケア体制整備などが社会的に評価されなければなりません。

本書は著者の長い学識経験を踏まえて、歴史的観点、国際的な比較論、多くの職員が国家資格をもち、加えて、その中でも医師という患者と直接準委任契約を有する集団がいる医療の特異性を示しつつ、実働部、技術部、指示部とそれらを統括する経営層、管理部からなる運営の方法を提案しています。言い換えれば、患者に直接接するサービス層とそのサービス層を支えるサポート層、そして、全体を指示する基盤、ベース層の役割分担と連携がなければ病院は機能しません。Ⅶ章で函館市の社会医療法人高橋病院の事例を紹介していますが、わが国の一般病院としてはよい選択だと思います。極めて実践的に分析された事例であり、今後の病院経営と運営のモデルになり得るでしょう。

診療報酬制度を鑑みてみると、DPCなどを含め病院においてもICTの活用によるデータ分析は不可欠です。さらに、地域との連携、さらには、地域づくりにはIoTを活用し、いわゆるポピュレーション・ヘルス・マネジメントへ繋げていくことが望ましいと思います。本書では情報の活用があまり述べられていないので次期の改訂に委ねることになるでしょう。

医学書院の雑誌「病院」と併用しながら本書が病院経営者、管理者の指針になることを望みます。

医療管理

病院のあり方を原点からひもとく

池上 直己

病院が進むべき道を決めるための
地図とコンパス

医療を知り尽くし、病院の運営に精通し、才能を十分に発揮し、
抱える経営上の課題を解決するために、医療と経営の両方の視点から、
病院の発展的な発展をひもとく。より明確な経営戦略に結びつけるために、
病院マネジメントに携わるすべての必読書。

医学書院

池上 直己 著

A5判/172頁/2018年7月/定価(本体3,200円+税)/ISBN978-4-260-03611-5/医学書院刊